
魔法少女リリカルなのは～闇を統べし者～

ノワール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは～闇を統べし者～

【NZコード】

N5046M

【作者名】

ノワール

【あらすじ】

俺は壊す。

このセカイを全て。

見てしまった、知つてしまつた。

だから、俺は

プロローグ（前書き）

はじめまして、ノワールです。

この作品は処女作なので意見感想などを聞きながらゆっくりとや
つていただきたいです。

いろいろとよろしくお願いします。

プロローグ

懐かしく、恥まわしい記憶。思い出したくもないはずなのになぜ夢なんかで見ないといけないんだろう。そんなことを思いつつ田の前に広がる世界を眺める。

「うう……殺して。口口してよお」
そう言って、ただ泣き続ける女性。

「あははははははははははははは！」
壊れたように笑い続ける男性。

「ねか、……そこ」

声すら満足に出せない自分と同じくらいの年頃の少年。

そんな地獄に9歳の頃の少年が愕然とした表情で立ち尽くしている。

「どうした？ なぜそんな顔をしているんだ？」

そんな少年に声をかける一人の男性。なぜ少年がそんな顔をしているのか心底わかつていはない様な顔で問い合わせてくる。

「……なんで」

だめだ。それ以上言いつんじやない。

ポツリと少年が呟いた。その間に男性は嬉しそうに答える。

「ん？ どうした？」

やめひ。答えるな。

そんな男性を見て少年は激昂する。

「なんでこんな酷い事してんだよー。」

それを聞いたら、もう戻れなくなるぞ。

そして、男性は答えた。答えてしまった。

「なぜって、これは世界のために必要だからに決まっているだろ
う！」

そう即たり前のように答える野性を見て、少年の中で何かが口々
れるオトがした。

「『んな』じが世界のためって『のな』、この俺が
『んな』世界をぶち壊してやるよー。」

「！」

男性を殺した後、そう少年は腐つきった世界に宣言した。
あわあわや

今思えば3年前のこの口から始まつたんだつた。

平凡な日常を歩く俺が死に、セカイを壊す『魔王』としての俺が。偽善によつて人を救い、独善によつて人を殺す。そうやってこの3年間生きてきた。きっとこれからも変わらないだらうし、変えるつもりも無い。

そう思つていたのに、あいつらがそれを変えやがつた。

これはありふれた英雄譚などではない。

運命と呼ばれる鎖によつて狂わされた1人の魔王の物語。それゆえにこの物語は何処かおかしく、それでいてひどく普通な物語である。

さあ、始めよう。楽しく悲しい3部作の一つ目を……

魔法少女リリカルなのは～魔を統べし者～始まります。

プロローグ（後書き）

どうでしたか？　だいたいこれくらいこの感じでやつてこきまわ。
ご意見、ご感想お待ちしております。

第一話 始まつは酷く優しい田原めかり（前書き）

連續投稿です。やっぱり一気に読めたほうがいいですもんね。
では続きです。

第一話 始まりは酷く優しい田間めかり

意識がゆっくりと浮上していく感覚。ああ、あの日の地獄が終わるのか。そんなことを思いながらゆっくりと田を開ける。するとそこには、

とびきりの美少女の表情のない顔が田の前にあった。

「……何をしてんだ？ イカロス」

「……いえ、マスターがうなされていよいよひつでしたので」

「……………そろか」

「……………はい」

彼女はイカロス。通称、戦略エンジニアード・タイプ『イカロス』俺の4人いる従者の内の1人である。桜色の髪を後ろで2つに結んでいて、スタイルも抜群。何を考えているのかがわからない無表情と天使のような薄いピンクの翼が特徴的な『超』が付くほどの美少女である。まあ、「綺麗な花には~」的な言葉通りの戦闘能力を有してはいるのだが……

「とりあえず顔が近い理由はわかった。だけどいろいろとこの体勢はまずいから離れてくれないか？」

「……………はい。マスター」

「……………」

「……」

「……えと、イ」

「ああ――――何やつてんのよ――！」

「はあ……」

突然響き渡る聞きなれた声。

「何もなかつたから落ち着け、ニンフ」

「レンは黙つて――」

「……は―」

先ほど大声をあげたのはニンフ。通称、電子戦用エンジニアロイド・タイプ『ニンフ』。俺の2人目の従者である。空色の髪をツインテールにしたイカロスとは対象的な容姿をした。勝気な瞳と妖精のような綺麗な羽が特徴のこれまた『超』が付いてもおかしくない美少女だ。

「いつたい何やつてんのよ――！　あんた、朝ご飯ができるから呼びに行つたはずでしょ！　どうやつたらあんな体勢になんのよ――！」

「……マスターがうつなされてたから

「だったら起こせばいいでしょ――！」

「……睡眠の邪魔をしたら駄目かと思つて

「だとしてもあんな体勢になる必要はないでしょ」が！！」

イカロスの行動に真っ先に突つかかっていくため、こんなことはわりとよくあることなのだ。押し問答を繰り返している彼女たちに関わつていれば正直時間がいくらあっても足りない。ここは放つて置こう。そう判断してさつさとリビングへと向かう。

「あ、おはよー。マスター」

「おはようござこます。ますたー」

階段を下りてリビングへの扉を開けると2人分の挨拶が聞こえてくる。

「うん。おはよう。アストレア、カオス」

先に挨拶をしてきたのはアストレア。長い金髪とイカロスにも劣らないスタイルをした彼女は通称、局地戦用エンジニアード・タイプ『アストレア』。感情豊かでみんなのムードメーカー的な存在である。これまた『超』美少女。

「マスター、マスター！ 私、掛け算ができるようになった！！」

頭がちょっと残念なことが玉にキズ。すごいでしょ、と笑いかけてくる彼女にさすがアストレアだね、などとあいまいに答えつつ最後の1人に視線をやる。

「クスクス、そのくらい簡単だよ」

得意げに掛け算を始めたアストレアを見ながら笑っている少女。いや、幼女。彼女はオメガ。彼女は『第2世代』と呼ばれるエンジエロイドで、先ほどまでに上げた3人とは少々違う。髪はアストレアと同じく金。舌つ足らずなしゃべり方と俺以外の人間には毒舌なことが特徴である。

そうやつて3人で楽しく会話をしていると階段を下りてくる音が聞こえてくる。そのまま、乱暴に扉が開かれる。

「あー もー、少しは私の言ひことも聞きなさいよ」

「……聞いてる」

「1回で聞きなさいって言つてるの」

もう10分はたつているのにまだにわいわいやつている。イカロスとニンフは飽きないのだろうか。

「2人ともそろそろやめてご飯にしよう」

というより空腹を我慢できないだけなんだが。それは2人もなんかおとなしく従ってくれている。そのまませつと準備を終わらせて全員が席に着く。

「そんじゃ、いただきます」

「」「「「いただきます」」」

これが俺、『特S級広域次元犯罪者』レングラント・AIN

ツベルンの1911年の一日の始まり。

第一話 始まりは酷く優しい田原めかひ（後書き）

そのおとしものはマイナーだったでしょうか？

まあ、面白満足の部分があるので見逃してください。

7/12、修正・加筆

今日はもつひとつへりご投稿するつもりです。

第一話 白毛少女と黒毛少女（前書き）

第一話です。

やつぱつ実際に書くのは難しいですね。

それでせびひが

第一話 白き少女と黒き少女

そんなこんなで朝食を終え、5人でゆつたりとした時間を過ごす。ああ、やっぱり平和はいい。そんなことを思つているとニンフがそういえばと話しかけてくる。

「最近、このあたりで魔法が頻繁に使われているみたい。それも強力なヤツが」

「へえ、俺は気付かなかつたけど……いつ頃から?」

「の家には一種の結界が張つてある。この結界は中での魔法の発動などを完璧に隠すことができるすぐれもの。ただ欠点があつて外で行われた魔法なども感知し辛くなるのだ。まあ、完璧など存在しないといつことが証明だらうか。

「まあ、しかたないわよ。私がなんとか感知した程度なんだから」

ニンフは電子戦用と呼ばれているのは戦闘能力が低いかわりに後方支援に特化しており、探知などが脅威的に優れているからにほかない。そんな彼女だからこそこの結界内でも外の様子を知ることができるのだ。

「そつか、『苦勞様。』

やさしく頭を撫でながら労わりの言葉をかける。

「ふ、ふん！ 私にかかればこの程度楽勝よ……」

顔を赤らめながら答えるニンフ。この時の彼女は本当にかわいい。いつもこんな顔をしていればいいの……

「なら次に反応があつたとき様子を見に行ってみようか」

そう4人に言つとそのままみんなでまつたりとくつり始めた。

その日の夕方、イカロスとカオスをつれて夕食の買い出しをしていた。もちろん、イカロスの翼は隠してある。

「今日はなんにしようか?」

「……マスターが食べたいものがいいです」

「カレーが食べたい!」

そんな会話を続けつつ3人でゆっくりと歩いていく。というか、イカロスにはもう少し自分の意見というものを持っていて欲しい。するとその時ニンフから念話が届く。

『レン、今朝言つていた反応がまたあつたわよ』

『そか、わかつた。少し様子を見てくるよ』

『……気を付けなさいよ』

『わかつてゐる。見に行くだけだよ』

少し不安げな二シフの声を聞きながらイカロスたちの方へと体の向きを変える。

「イカロス、カオス。例の反応があった。イカロスは俺と、カオスは荷物を持つて帰つてくれ」

「ええ、わたしも行きたい！！」

不満げな声を挙げるカオスを無視してそのまま人気の無い場所へと向かう。

「行くぞ、イカロス。カオス、おみあげ買って帰るから我慢してくれ」

「……はい、マスター」

「はい。……絶対だよ！」

「うん。約束する」

そう言つて俺のデバイス。ストレージデバイスの『フェンリル』を構えるとバリアジャケットを開く。その間にイカロスは無言で翼を広げる。

「いつてきます

「……いつてきます」

イカロスの翼が羽ばたく音とカオスの行つてりつしゃいといつ
声を聴きながら空へと飛び立つ。もちろん我が家に展開してある応
用の認識障害の魔法を俺たちに付与しておいてよほどの存在でなけ
れば俺たちには気付けないようにしてからだが。

「いったいなんなんだうな

「……なんであろうと関係ありません。マスターの害にならそつ
なら排除するだけです」

「そか、ありがと。イカロス」

「……いえ

謎の反応に思いを馳せつつ空をかける。はあ、何の害も無けれ
ばいいけど……

そして到着した俺とイカロスの間に飛び込んできたのは、
1匹の巨大な猫に魔法を叩き込んでいる黒い少女とそれを呆然と眺
める白い少女だった。

あー、…………なんだこれ？

第一話 白き少女と黒き少女（後書き）

あとがきです。

何とか書き上げることができました。皆さんに楽しんでいただけているのならいいんですが……

よくよく考えたらニンフはマスターなんて言こやつこない気がしてきましたので修正しました。

7 / 12、修正・加筆。

はあ、これが難産か

第三話 やねやねの歌 (前書き)

更新遅れています。ません。

インターネットに繋がんなくて……

それせいでおも雑談を楽しめなくなってる。

第三話 それぞれの思い

Side・高町なのは

私、高町なのは。現在小学3年生。ついこの間まで普通の女の子だったなんだけどコーノ君に出会ってからは私、魔法少女やつてます。今日は、すずかちゃんのお家にお呼ばれされてました。そしたら、偶然すぐ近くでジュエルシーの反応があつたから急いでやつてきたんだけど……

「ここやあ~~~~~」

「なんなのかな？あれ……、おつきな猫さん？」

「なのは。多分あれは子猫の早く大きくなりたいっていう願いが正しく叶えられたんだと思つ」

……あれつて、正しいのかな？

「まあ、いいや。封印しちゃうね」

「うん。周りに迷惑になる前にやっしゃおひ

そんな会話をコーノ君として、バリアジャケットを展開する。

「レイジングハート、set up---!」

「stand by ready, set up」

これって一度裸になっちゃうからこやなんだけば、そんなこと言つてられないよね。がまんがまんだよ。

「リリカルマジカル、ジュエルシード封」

「バルディッシュ。フォトンランサー連撃」

「Photon launcher, full auto fire」

そんな声と同時に光の雨が猫さんに向かって降り注いだ。

Side · フライト · テスター

初めてまして。フライ特・テスターです。わたしはジュエルシードを探していました。ふと、その気配を感じたのでそこに向かってみるととても大きな猫さんがいました。おそらくジュエルシードを取り込んでしまったのでしょう。かわいいですが、心を鬼にしてやりましょうか。

「バルディッシュ。フォトンランサー連撃」

「Photon launcher, full auto fire」

「ふにゅー!?」

フォトランサーはそのまま猫へと直撃していきましたが、まだ反応は消えていません。わりと頑丈なようです。……面倒ですが『彼』のためです。次で終わりにしましょう。そういえば、視界の隅に白い服の魔導師らしき少女が見えたような気がしますが無視します。

「 sealing mode - get set」

「捕獲」

巨大な雷が猫さんへと向かっていきそのままジュエルシードをはじき出す。

「ギーヤアアアアアアアア！」

猫さんはとても苦しそうな悲鳴を挙げています。…………わりと気持ちいいと思つただけなあ、これ。……まあ、いいです。

「封印」

「 yes sir」

バルディッシュが短く答えると上空に雷雲が生まれ、そのまま雷が落ちてくる。そしてそれはジュエルシードを封印し、猫さんをもとに戻していきました。わたしは封印されたジュエルシードにバルディッシュをかざします。

「 capture」

ジュエルシードがバルティツシユの中へ収納される。そのまま飛び去ろうとすると先ほどの魔導師らしき少女が話しかけてきます。

「ね、ねえ。そのあなたは　」

なんだかとても馴れ馴れしいです。イラッ と来たので一喝つてやつちやいましょう。

「子供は家でママのおっぱいでも吸つてなさい」

この間、『彼』といっしょに見た映画で主人公が言つていたセリフを使ってみました。口を半開きにして固まっている少女を鼻で笑いさつわとの場を去る。

ああ、『彼』は褒めてくれるだろうか。

そんなことを思ひながら……

Side · レングラント・アインツベルン

「プ、プ。普ハハハハハ！　見てたか、イカロス！？　まさかあいつがあんなこと言つなんて思つてもいなかつたよ！－」

フヨイトがまさかあんなセリフを言つだけでここまで笑えるなんていふこと知つたな。なんてこと思いながら爆笑しているとイカロスが話しかけてきた。

「……マスター」

「ククク。ん？ デリしたイカロス」

「いえ、いまの発言はひと月ほど前に彼女と見た映画の中にもつたく同じものがありました」

「…………あれ。もしかして俺のせい？」

だとしたらヤバい。ただでさえ彼女の母親であるプレシアよりも懐かれているからって理由でプレシア本人からあまりいい顔をされていないのになんな言葉を教えて、あまつさえそれをフェイト本人が使つたと知られたら……。殺されるんじゃないだろうか。

「イカロス。どうしよう？」

「…………すいません、マスター。私にはデリしたらいいかわかりません」

うん。だらうと思つたけどさ。……よし！ 忘れよう！……俺はナーモシリマセン。

「イカロス。フロイトをウチに連れてきて」

「…………マスターはどうするんですか？」

「俺は先に帰つて夕食の用意をしてるから」

「…………わかりました。いつきます。マスター」

飛び立っていくイカロスを見送つて家へと向かう。全力で料理することを強く決意して……

第三話 それぞれの想い（後書き）

どうでしたか？

自信ないです。アドバイスがもらえたうれしいです。

第四話 黒き少女の全て（前書き）

皆さん、お久しぶりです。

最近なかなか時間が作れなかつたんですけど頑張りますので応援お願いします。

第四話 黒き少女の全て

あれから約一時間が過ぎた。現在、あの時に見たものは全て忘却の彼方へと追いやリキッキンで料理に全力を注いでいる。もうそろそろイカロスがフェイト達を連れてくるだろつ。あいつらと会つのはひとつもふりだな……。

「……ただいま戻りました」

「イカロス。お願いだから一つの間にか背後に立たないでくれ」
なんなんだわつ。こつは俺を驚かすのに命でも賭けているのだ
ううつか。

「久しづぶり。レン

「ああ、久しづぶりだな。フェイト」

「ひつさしつづりだね！ レン！」

「おう、アルフもひさしつづムツー！」

オレンジ色の髪をした女性、彼女の使い魔であるアルフにも挨拶をしようとしたのに途中で抱きしめられて遮られた。……まあ、役得だからいいけれどわ。

「ん~、相変わらずいい匂いがするんだね~」

アルフは「いつまつてよく俺を抱きしめる。こつもなりここけび今は駄目だ。せつかくの再会なんだからこのままでは駄目だ。けど、……もう少しだけ。

「あんたは向やつてんのよ。いい加減にしなさい。」

「ンンフの怒鳴り声でふと我に返る。そのままアルフを引きはがす。「あう、ちよつとくらこっこじやないか」

「駄目に決まつてんでしょう。あんたは自分のマスターに抱きついてなれ……」

「だつてフロイトよつレンの方がいい匂いがするんだからしかたないじやないか！」

「あれこれやこ言ひ合つてゐる一人は放置して、と。

「飯の用意はできてるだ

「うふ。レンの」飯、楽しみだよ」

「……みんなを呼んでおまか」

フロイトといカロスを連れてリビングへと向かつ。おつと、そのまま前に……

「おかえり、フロイト」

「うん、ただいま」

恒例行事をやつたら心底うれしそうにフロイトは返事をしてくれた。

「そうだ。ねえ、レン」

イカロスが口を呼びに行つていて、アルフとニーンフはキッチンでケンカ中。ふと何かを思い出したかのようなフロイトが話しかけてきた。

「なんだ？」

「やつきの戦い見てたでしょ」

「な、なんで？ 気付いたのか！？ 気配は消してたはず！！

「なんでって顔してる。私が気付かないわけないよ。レンが一キロ以内にいれば匂いでわかるから」

.....
「はい？.....匂いだって？

「で、どうだった？」

「あ、あ～っと。あのセリフはまずいんじゃないかな？」

「そ、うか？ いいと思つたんだけど.....」

「フレシアに怒られると思つた」

「あればどうでもいいけどね」

フレシアは《あれ》扱いかよ……。

「もしかして、おしおきかな?」

表情こそ変わらないがキラキラとした瞳で見つめてくるフレイト。

「……変わってないな。」

そのマゾ思考は。

「当たり前だよ」

そうなのだ。いつからかフレイトは痛いの大好きなマゾっ娘になってしまったのだ。あの時のフレシアの困惑ぶりは田も当地られなかつた。

「私にとつてあなたが全て。あなたのためならどんなことでもするし、あなたがすること全てを受け入れる。普通じゃあなたを受け入れきれないと思ったから私は変態になつただけだよ」

さも当然といった風に続けたフレイト。……ああ、愛が重いなあ。

「大好きだよ。レン」

「……そりゃどーも」

第四話 黒毛少女の金子（後書き）

フュイトの異常性をアピールしてみました。

どうですかね？ フュイトは捧げるタイプだと思ったのでこんな風にしてみました。

感想など他のキャラはどんな変態がいいなどありましたらどんどん意見をください。ノワールでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5046m/>

魔法少女リリカルなのは～闇を統べし者～

2011年1月7日00時46分発行